

ラクゴ・ザ・フューチャー

第七十二回…ビバ・ミュージカル！

文…田中啓文

こないだ、「華王」という中華屋に行った。中華屋といっても、東京のビル街にある、高級中華料理店である。いわゆる「料理の鉄人」が経営しているらしい。こういう店では、「紹興酒、燗してちょーだい」などと下品なことを言っているはいかん。まずは、ビールではじめ、そのあと、カクテルに移るのが妥当だという。カクテルは、マティーニがよからう。え？ 何の話かって？ もちろん、横山光輝先生の追悼です。「ビールのマティーニ。華王」っていうことで。

話は変わって、旅行会社のポスターには、ときどきハツとさせられる。ビキニのお姉ちゃんが写っているからではない。旅行会社のポスターには、ときどき秀逸な駄洒落が使われていることがあって、いわゆる「職業的興味」でハツとさせられるのである。きのう、駅で見たやつは「SUN、SEA、GO！」とあって、めっちゃめっちゃ感心した。真夏の太陽がささんと輝く下、大海原が広がっている。さあ、今すぐ行く！ という感じがよくでていないか。元コピーライターだった中島らも大先生は、最近のCMにおける駄洒落の連発を嘆いておられたが、うまく使えば駄洒落も生きてくる。こういうのは、関西の会社に、なかなかいいノリのやつがある。でっぴり太った、陽やけしたハワイ人のおっさんがにこにこ笑っていて、「ワイキキのことはワイに聞き」というやつ。あれにはすっかり脱帽しました（半分以上、「ほんまにやるかー」という気持ちが入っている）。かなりまえのやつだが、

台湾旅行のポスターで、「行ってみたいわん」（うる覚えなのでちがってるかもしれない）とかいうのがあって、あれにはハートをヒットされた。その手の駄洒落観光ポスターのなかで、いちばん「これはええなあ」としみじみ思ったのは、

「人・夏・恋」というやつで、たしか沖縄だかどこだか南国のやつだった。私の目からはめっちゃめっちゃ秀逸に思えるのだが、あまり話題にならんかったように思うのはどうしてか。

とか言ってるうちに、枚数が終わってくればいいのだが、そうもいかないようなので、今回の本題に入りたいと思う。

「てるてる家族」というドラマがあった。NHKの朝の連続テレビ小説というやつで、こないだ終わってしまった。私も、いろんな「朝の連ドラ」を見てきたが、これほどはまりまくったのははじめてである。これまで、私のなかでは「ふたりっ子」が一位だったわけだが、今回、「てるてる家族」の登場で、一位は入れかわった。とにかく、「のんき」な話だった。

たまに、ちよこつと深刻なエピソードも混じってたりするのだが、それも、普通のホームドラマなら、「あつ、深爪しちやった」程度の深刻さ。ほとんどが、明るく、のんきで、どうでもいいようなネタの連続。しかも、これはかなり驚くべきことだが、ヒロインの恋愛沙汰が、半年間続いたドラマのなかで、最後の数回しか語られないのだ（しかも、不幸なおいたちをした幼なじみの青年は、ギター伴奏とともに、宙づりになって愛を告白する）。たいがい、第一回からいきなり恋愛がらみのストーリーが展開する朝ドラのなかで、この大英断にはびっくりした。だいたい朝っぱらから、ヒロインが誰を好きだろうときらいだろうと告白しようとふられようと妊娠しようと別れようとーでもいいのであって、我々はようするに一日のはじまりにおもしろいお話を見たいわけである。「てるてる家族」はその意味で「朝っぱらに最適」の

ドラマだった。ギャグもふんだんで（というか、ほとんど全編ギャグ。一部の好事家にしかわからぬ小ネタは炸裂するし、万人受けのする大ネタも連発）、あっちこっちで笑わせていただいたが、なかでも「朝ドラ」はじまって以来という「無意味なミュージカル仕立て」という趣向には大笑い。

とにかく、あらゆる箇所、突然、登場人物が歌いだし、踊りだし、伴奏がババーツと入って、次の瞬間には、その場にいあわせた全員が、一糸乱れぬ振りで歌い踊りはじめるのである。それまでが、けっこう普通のリアルな芝居が進んでいると、そのギャップに爆笑してしまうことになる（まあ、「ぶらり信兵衛道場破り」みたいな感じが。わからん？）。

しかし、考えてみると、ミュージカルというのは、たいがい「リアルな芝居→突然、皆が歌い踊りだす」わけであって、どんなシリアスなミュージカルも様式としての一種の異常性を抱えていることはまちがいない。だって、ふだん、我々は道で誰かとしゃべっていて、急に歌ったり踊ったりしないじゃないですか。映画や舞台だからいいけれど、現実にあんなことがあつたら、それこそ機動隊が出動する騒ぎになる。異常といえば、あのオペラというやつも、やたら体格のいい男が客席を向いて、「おお、恋に破れた我は雪の日に降る星のごとくやつれ果て……」とかわけのわからん歌詞を、どこがやつれ果てとるねん、と言いたくなるような朗々とした元気な声で歌いまくる、奇々怪々な芸能だが、ミュージカルも負けてはいない。

というわけで、ミュージカルについて考察してみたいが、日本のミュージカルシーンでメジャーな劇団といえば、宝塚歌劇と劇団四季だろう。とくに劇団四季は、海外の有名ミュージカルの日本版を上演することで知られており、ミュージカルは好きだけど海外まではちょっと、という人や、英語が

わからんさかい日本版しか見られんのじゃ、という人には最適である。四季の代表者はいわずと知れたシジミけいた氏、あ、これはクレヨンしんちゃんのギャグでした。以前、テレビを見ていたら、四季のミュージカルに出演が決まった若い役者たちをまえに、そのミュージカルの舞台となるアメリカの何とかいう町がどこにあるのかを質問し、答えられなかった役者に、「ぼくだったら調べるねえ……」と嫌みたっぷり言っているのを聞いて、それ以来、あの人がテレビに出るたびに、「ぼくだったら……」というフレーズが頭に浮かんでしかたがない。

「あんたもシキファンですか」

「いや、まあファンというわけじゃないんですが……」

「私は好きですなあ、劇団死期。あの、九十歳以上の死にかけの爺さんばかり集めた劇団。こないだ見たやつなんか、最高でした。年とっても煙草がやめられんで、肺がおかしなつとる爺さんの集団、爺さんズの面々が、病院の待合室で、暗い顔で自分の喫煙体験を告白したあげく、それでも煙草やめられんで、ひとりまたひとりとスパスパ吸い始める……いやー、煙草好きの悲哀を描いた傑作でした」

「それ、なんちゅうミュージカルですねん」

「知りまへんか。『爺さんズ、暗いすつと、スパスパ吸った』ちゅうやつです」

「あんた、もうあっち行きなはれ」

「あんたもシキファンですか」

「いや、まあファンというわけじゃないんですが……」

「私は好きですなあ、劇団子規。あの、俳句の革新を行った正岡子規ゆかりの俳人ばかり集めた劇団。こないだ見たやつなんか、最高でした。セリフは全部五七五なんですけど、ラストシーンで、巨大なエヴァンゲリオンが出現して、出演

者全員が『柿食えば……えば……エヴァ……エヴァエヴァエヴァ！』と歌いながら大乱舞するところは圧巻でした」

「なんのこっちゃ」

「そのあとアンコールに應えて、ふたりの役者が出てきて、開いた傘のうえでいろんなものをくるくる回すんですわ。すばらしかったなあ」

「それ、なんちゅうミュージカルですねん」

「知りまへんか。『エビータ染之助・染太郎』ちゅうやつです」

「あんだ、もうあっち行きなはれ」

「あんだもシキファンですか」

「いや、まあファンというわけじゃないんですが……」

「私は好きですなあ、劇団士気。サムライの魂をもった役者ばかり集めた集団。こないだ見たやつなんか、最高でした。セリフが全部、古風な言い回しなところがよろしい。『うぬらのごとき木っ端役人に捕まるそれがしではないわ』とか、しびれますなあ」

「なんのこっちゃ」

「舞台は、とあるハカリ屋です」

「ハカリ屋？」

「ほら、計量器ばかり売ってる店。あそこで、天秤バカリとか体重計とかいろんなハカリたちが、人間が寝静まった深夜に、年に一度の舞踏会を開きまんねん。ヒロイン役の女優が歌う『目盛り』ゆうナンバーはこれまたしびれまっせえ」

「それ、なんちゅうミュージカルですねん」

「知りまへんか。『彼奴（きゃつ）』ちゅうやつです」

「ちよっとベタすぎるなあ。あんだ、もうあっち行きなはれ」

「あんだもシキファンですか」

「いや、まあファンというわけじゃないんですが……」

「私は好きですなあ、劇団私記。落語家の立川流門下ばっか

り集めた集団。こないだ見たやつなんか、最高でした。家元の談志師匠が自分の私記を書きはって、それをミュージカル仕立ての劇にしてはりますねん」

「それ、なんちゅうミュージカルですねん」

「知りまへんか。『劇・談志記』ちゅうやつです」

「あんだ、もうあっち行きなはれ」

「あんだもシキファンですか」

「いや、まあファンというわけじゃないんですが……」

「私は好きですなあ、劇団指揮。クラシックの演奏家ばかり集めた集団。こないだ見たやつなんか、最高でした。オペラ仕立てになつとるんですが、何と言つても舞台装置がすごい。凝ってます。舞台は、あるお寺の地下ちゅう設定ですねけど、ここに馬鹿でかい、天井までもある、半透明の巨大なオブジェが作られてますのんや」

「それ、なんちゅうミュージカルですねん」

「知りまへんか。『半透明オブジェ・お寺』ちゅうやつです」

「それ、かなりわかりにくいでつせ。あんだ、もうあっち行きなはれ」

「あんだもシキファンですか」

「いや、まあファンというわけじゃないんですが……」

「私は好きですなあ、劇団飼記。いろんな珍しい動物を飼ってる人ばかり集めた集団。こないだ見たやつなんか、最高でした。主人公が飼ってるライオンと、その友だちが飼ってるペンギンが恋に落ちるんです。ペンギンゆうてもただのペンギンやおまへん。テレビの人気者ピンゲーでつせ」

「それ、なんちゅうミュージカルですねん」

「知りまへんか。『ライオン・ピンゲー』ちゅうやつです」

「そのままやがな。もうちょっとひねりなはれ。あんだ、もうあっち行きなはれ」

「あんたもシキファンですか」

「いや、まあファンというわけじゃないんですが……」

「私は好きですなあ、劇団志旗。タレントの志村けんさんの旗のもとに、彼をしたつ俳優たちばかり集めた集団。こないだ見たやつなんか、最高でした」

「もう、言わんでもわかりましたけど、一応きいときます。

それ、なんちゅうミュージカルですねん」

「知りまへんか。『あいゝんだ』ちゅうやつです」

「あんた、もうあっち行きなはれ。二度と帰ってきなはんな」

「あなたもシキファンですか」

「このへんで終わりにしたいなあ。いや、まあファンというわけじゃないんですが……」

「ぼくは好きだね、劇団失禁。どうしてもおねしょをしてしまふ俳優ばかり集めた集団」

「あかんやろ、そんな劇団」

「こないだ見たやつなんか、最高だった。おねしょというのは、お風呂に入る夢とか、川に落ちる夢を見たときなんかに、してしまうという話を聞いたことあるだろ。その芝居は、現実の世界でのできごとと、夢のなかのできごとが、並行して進んでいくのさ」

「メタな趣向になつとるわけですね。で、夢と現実、どっちが先行するんですか」

「そりゃもちろん『夢からさ、メタ夢』」

「あんた、もうあっち行きなはれ。なんか標準語でしゃべってると思ったわ。あ、そろそろ開演時間や。急いで駄洒落を思いつかんかった『マンマ・ミーア』見にいかな」

というわけで、本日これまで。また来月。

来月の五日には、久々のギャグ短編集『蹴りたい田中』がハヤカワJ A文庫から発売されている予定。次回は『蹴りた

い田中『特集にするので、よろしく！』。

（了）